

エゼキエル書36-39章 「御霊が注がれるイスラエル」

1A イスラエルの回復 36-37

1B 土地の回復 36

2B 国の回復 37

2A イスラエルの救い 38-39

1B 北の果てからの包囲網 38

2B 確実な死の確認 39

本文

私たちは午前の礼拝で、今がどのような時であるか、その大枠を学びました。そして午後は、エゼキエル書の 36 章から 39 章、特に後半部分 38 章と 39 章に注目したいと思います。エゼキエル書を学ぶ時、それが黙示録のように多くの幻が書かれており、読むのがかなりしんどいと思います。けれども、一つのことを念頭に入ると読み易いです。それは、「神が御霊によって新たに生まれさせ、その神殿の中に住まわせてくださる。」ということです。神の聖霊による回復、そしてその回復によって神の栄光を眺めるというすばらしさを味わうことができます。

エゼキエルは、神の祭司でありました。けれども、紀元前 597 年の第二次バビロン捕囚によって、エルサレムからバビロンに捕え移された祭司です。彼は神から、エゼキエル書の前半部分において、エルサレムにまだ残っている神殿が人々の悪い行いによって汚されていること、それによって破壊されることを預言しました。そして、事実、紀元前 586 年に神殿が破壊されました。その知らせを彼が受けた後に、主は、今度は、イスラエルが回復する預言を彼に与えられました。それが 33 章以降です。そして 40 章には、栄光に輝く神殿の姿、神の国における神殿の幻が書かれています。私たちがこれから眺めていくのは、その神殿の建てられる前に起こる出来事を見ていきます。

そこで、主はイスラエルをいろいろな形で回復されます。36 章においては、荒らされたイスラエルの土地が木々に覆われて、町々が建てられる、人々が住みつくといい預言があります。そして 37 章には、イスラエル人が国として復興するという預言です。しかし、それだけでは不十分です。その土地の回復と国の回復の後に、神の霊が注がれて、霊的に回復する。新しく生まれるという約束があります。すでに 11 章 19 節で、主はそのことを約束してくださっていました。「わたしは彼らに一つの心を与える。すなわち、わたしはあなたがたのうちに新しい霊を与える。わたしは彼らのからだから石の心を取り除き、彼らに肉の心を与える。」

この約束について、イエス様はニコデモに対して語られました。「ヨハネ 3:3,4,6「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」・「まこと

に、まことに、あなたに告げます。人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国にはいることができません。肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です。」イエス様によって与えられる御霊の新生を、イスラエルは終わりの日に経験します。私たちもそのことから、御霊の働きがどのようなものかを確認することができます。

そしてこれから読んでいく時に、このイスラエルの回復がたった今、私たちの時代で進行中であることを確かめていきます。そのことによって、キリストが再び戻ってこられる、地上に再臨される時が近づいていることを確かめることができるのです。

1A イスラエルの回復 36-37

1B 土地の回復 36

36:1 人の子よ。イスラエルの山々に預言して言え。イスラエルの山々よ。主のことばを聞け。
36:2 神である主はこう仰せられる。敵がおまえたちに向かって、『あはは、昔からの高き所がわれわれの所有となった。』と言っている。36:3 それゆえ、預言して言え。神である主はこう仰せられる。実にそのために、おまえたちは、回りの民に荒らされ、踏みつけられ、ほかの国々の所有にされたので、おまえたちは、民の語りぐさとなり、そしりとなった。36:4 それゆえ、イスラエルの山々よ、神である主のことばを聞け。神である主は、山や丘、谷川や谷、荒れ果てた廃墟、また、回りのほかの国々にかすめ奪われ、あざけられて見捨てられた町々に、こう仰せられる。36:5 それゆえ、神である主はこう仰せられる。わたしは燃えるねたみをもって、ほかの国々、エドム全土に告げる。彼らは心の底から喜び、思い切りあざけて、わたしの国を自分たちの所有とし、牧場をかすめ奪ったのだ。36:6 それゆえ、イスラエルの地について預言し、山や丘、谷川や谷に向かって言え。神である主はこう仰せられる。見よ。おまえたちが諸国の民の侮辱を受けているので、わたしはねたみと憤りをもつて告げる。36:7 それゆえ、神である主はこう仰せられる。わたしは誓う。おまえたちを取り囲む諸国の民は、必ず自分たちの恥を負わなければならない。36:8 だが、おまえたち、イスラエルの山々よ。おまえたちは枝を出し、わたしの民イスラエルのために実を結ぶ。彼らが帰って来るのが近いからだ。36:9 わたしはおまえたちのところに行き、おまえたちのところに向かう。おまえたちは耕され、種が蒔かれる。36:10 わたしは、おまえたちの上に人をふやし、イスラエルの全家に人をふやす。町々には人が住みつき、廃墟は建て直される。36:11 わたしは、おまえたちの上に人と獣をふやす。彼らはふえ、多くの子を生む。わたしはおまえたちのところに、昔のように人を住まわせる。いや、以前よりも栄えさせる。このとき、おまえたちは、わたしが主であることを知ろう。

バビロンによって、エルサレムの町は破壊されました。そして、エドム人など、他の民族によってこの土地が荒らされました。しかし、ここは主ご自身の土地です。主がご自分の民、イスラエルに与えられた土地です。まるで、ご自身が踏み荒らされたように、ねたみと熱情をもっておられます。そこで、8 節以降で、主はこの土地に彼らを帰らせて、その土地から作物の実を結ばせて、そして人々を増やし、多くの町々を建てさせると約束されたのです。

七十年後に、ユダヤ人たちが戻ってもそのようにはなりません。エズラやネヘミヤが指揮を取って、そこに神殿が再建され、エルサレムの町も再建されましたが、周囲の敵に脅かされていきました。そしてペルシヤ帝国がそこを支配していました。次に来たのはギリシヤ帝国、それからローマ帝国が支配します。その時に、イエス様がお生まれになりました。そして、イエス様はローマによってエルサレムが再び破壊され、あなたがたは再び捕虜となることを預言されました。「人々は、剣の刃に倒れ、捕虜となってあらゆる国に連れて行かれ、異邦人の時の終わるまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされます。(ルカ 21:24)」事実、紀元後 70 年に、エルサレムをローマ軍が破壊し、ユダヤ人は世界に離散したのです。

けれども、紀元 70 年から約 1800 年を経た時、つまり 19 世紀半ば、反ユダヤ主義が吹き荒れているヨーロッパとロシアから、少数のユダヤ人が、当時はパレスチナと呼ばれていた地に帰還しはじめたのです。そして彼らが行なったことは、土地の開墾でした。東ヨーロッパとロシアからの帰還民でした。彼らが理念として掲げ、情熱を注いだのは農地開拓でした。当時は、オスマン・トルコがそこを支配していました。土地税を、木一本、一本に対して課したので、地主は木々を抜いてしまったのです。そのため、パレスチナの地は荒れ放題で、また沼地があるのみでした。そこに帰還民がやってきて、荒地を開墾し、マリアと戦いながら沼地から水を抜いていきました。そして、ついにヨーロッパではホロコーストが起こりました。その大迫害の中で、ユダヤ人難民が怒涛のごとくパレスチナの地に戻ってきました。そしてついに 1948 年、イスラエルが建国したのです。そして今は、今は農産物輸出国になっているのです！

主は、11 節「このとき、おまえたちは、わたしが主であることを知ろう。」と言われるのです。神ご自身が行なわれたとしか言えない方法で、このことを成し遂げられたのです。

農地だけでなく町々に人が住みつくとあります。イスラエルの空の入口はベングリオン空港ですが、テルアビブの郊外にあります。このテルアビブは何もないところだったのを、帰還したユダヤ人が建て上げた近代都市の一つです。今や、ほぼ 40 万人を有する大都市になっています。そして今やイスラエルの生活水準は、先進国の水準です。農産物の他に、イスラエルが際立っているのは IT 技術や医療技術です。これも、その通りになりました。

36:12 わたしは、わたしの民イスラエル人に、おまえたちの上を歩かせる。彼らはおまえを所有し、おまえは彼らの相続地となる。おまえはもう二度と彼らに子を失わせてはならない。36:13 神である主はこう仰せられる。彼らはおまえたちに、『おまえは人間を食らい、自分の国民の子どもを失わせている。』と言っている。36:14 それゆえ、おまえは二度と人間を食らわず、二度とおまえの国民の子どもを失わせてはならない。..神である主の御告げ。..36:15 わたしは、二度と諸国の民の侮辱をおまえに聞こえさせない。おまえは国々の民のそしりを二度と受けてはならない。おまえの国民をもうつまずかせてはならない。..神である主の御告げ。..」

12 節から 15 節は、この土地で数多くの人が死んでいき、人口が増えない状況であったところが、どんどん子供が増えていくという預言です。これもイスラエル建国以来、人口が増えていくことによって成就しています。

36:16 次のような主のことばが私にあった。36:17 「人の子よ。イスラエルの家が、自分の土地に住んでいたとき、彼らはその行ないとわざとによって、その地を汚した。その行ないは、わたしにとっては、さわりのある女のように汚れていた。36:18 それでわたしは、彼らとその国に流した血のために、また偶像でこれを汚したことのために、わたしの憤りを彼らに注いだ。36:19 わたしは彼らを諸国の民の間に散らし、彼らを国々に追い散らし、彼らの行ないとわざとに応じて彼らをさばいた。36:20 彼らは、その行く先の国々に行っても、わたしの聖なる名を汚した。人々は彼らについて、『この人々は主の民であるのに、主の国から出されたのだ。』と言ったのだ。36:21 わたしは、イスラエルの家とその行った諸国の民の間に汚したわたしの聖なる名を惜しんだ。

イスラエルの民がその土地の中で恥ずかしいこと、忌まわしいことを行いました。それで、主は裁いて、彼らを国々に散らされました。そして彼らはそしりを受けました。これは、その通り起こりました。世界の離散の地で、ユダヤ人は迫害を受け、虐殺を受け、そして最も恐ろしいのは六百万人が死んだホロコーストでした。しかし 21 節を見てください、「わたしは、イスラエルの家とその行った諸国の民の間に汚したわたしの聖なる名を惜しんだ。」と言われます。

36:22 それゆえ、イスラエルの家に言え。神である主はこう仰せられる。イスラエルの家よ。わたしが事を行なうのは、あなたがたのためではなく、あなたがたが行った諸国の民の間であなたがたが汚した、わたしの聖なる名のためである。36:23 わたしは、諸国の民の間で汚され、あなたがたが彼らの間で汚したわたしの偉大な名の聖なることを示す。わたしが彼らの目の前であなたがたのうちにわたしの聖なることを示すとき、諸国の民は、わたしが主であることを知ろう。…神である主の御告げ。…36:24 わたしはあなたがたを諸国の民の間から連れ出し、すべての国々から集め、あなたがたの地に連れて行く。

主は何度も、「あなたがたのためではなく、わたしの聖なる名のためにあなたがたを連れて行く」と言われています。これが重要です。主はこれから、彼らにご自分の霊を注がれます。しかし、それは彼らが積極的に何かを行ったから注がれるのではなく、主にご自分の名誉のゆえにそれを行われるのです。

ここに、私たちはリバイバル、霊的復興、あるいは霊的覚醒の原則を見るのです。主が私たちに救われたのは、私たちのためではないのです。私たちに救うことによって、ご自身がいかに恵み深い方であるのか、どんなに愛に満ちあふれ、人に対する思いがどれほど恵みに満ちあふれているのか、そのことを知らせるために私たちに救われるのです。同じように、主は御霊の降り注ぎを行われるのは、私たちが何かをしたから、ではないのです。教会の世界では、「これこれをすれば、

日本にクリスチャンが増える！」ということで、懸命に努力します。いいえ、違うのです。主が圧倒的な主権で私たちに臨み、私たちが主なる神の聖さに恐れを抱き、ただひれ伏すということを行います。

36:24 わたしはあなたがたを諸国の民の間から連れ出し、すべての国々から集め、あなたがたの地に連れて行く。36:25 わたしがきよい水をあなたがたの上に振りかけるそのとき、あなたがたはすべての汚れからきよめられる。わたしはすべての偶像の汚れからあなたがたをきよめ、36:26 あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を授ける。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。36:27 わたしの霊をあなたがたのうちに授け、わたしのおきてに従って歩ませ、わたしの定めを守り行なわせる。

ここで、彼らが土地に集められ、そして土地が豊かにされて、町々に人々が住み、その後で主がご自分の御霊を注がれ、彼らを清めてくださいます。今、イスラエルに行っても、イエス様を信じているユダヤ人はごくわずかです。神を信じている人々も実は少ないのです。けれども、これからのが起こります。

そして 28 節以降は、御霊が注がれた後に、自分たちの豊かな土地を見て、いかに自分たちが恥ずかしいことをしていたかを悟ることを知ります。31 節だけを読みます、「あなたがたは、自分たちの悪い行ないと、良くなかったわざを思い出し、自分たちの不義と忌みきらうべきわざをいとうようになる。」私たちにもありませんか、イエス様を信じて、それでいかに自分の以前の行ないが、恥ずかしいことだったのかと悟るのです。「ローマ 6:20-22 罪の奴隷であった時は、あなたがたは義については、自由にふるまっていました。その当時、今ではあなたがたが恥じているそのようなものから、何か良い実を得たでしょうか。それらのものの行き着く所は死です。しかし今は、罪から解放されて神の奴隷となり、聖潔に至る実を得たのです。その行き着く所は永遠のいのちです。」それまでは当たり前が起こっていたことが、口に出すのも恥ずかしいことであることを知ります。28 節以降は、土地のみならず、御霊によって霊的にも回復した、キリスト再臨後の神の国の姿です。

2B 国の回復 37

37:1 主の御手が私の上であり、主の霊によって、私は連れ出され、谷間の真中に置かれた。そこには骨が満ちていた。37:2 主は私にその上をあちらこちらと行き巡らせた。なんと、その谷間には非常に多くの骨があり、ひどく干からびていた。37:3 主は私に仰せられた。「人の子よ。これらの骨は生き返ることができようか。」私は答えた。「神、主よ。あなたご存じます。」37:4 主は私に仰せられた。「これらの骨に預言して言え。干からびた骨よ。主のことばを聞け。37:5 神である主はこれらの骨にこう仰せられる。見よ。わたしがおまえたちの中に息を吹き入れるので、おまえたちは生き返る。37:6 わたしがおまえたちに筋をつけ、肉を生じさせ、皮膚でおおい、おまえたちの中に息を与え、おまえたちが生き返るとき、おまえたちはわたしが主であることを知ろう。」37:7 私は、命じられたように預言した。私が預言していると、音がした。なんと、大きなとどろき。すると、

骨と骨とが互いにつながった。37:8 私が見ていると、なんと、その上に筋がつき、肉が生じ、皮膚がその上をすっかりおおった。しかし、その中に息はなかった。37:9 そのとき、主は仰せられた。「息に預言せよ。人の子よ。預言してその息に言え。神である主はこう仰せられる。息よ。四方から吹いて来い。この殺された者たちに吹きつけて、彼らを生き返らせよ。」37:10 私が命じられたとおりに預言すると、息が彼らの中にはいった。そして彼らは生き返り、自分の足で立ち上がった。非常に多くの集団であった。

37 章は、イスラエルの国が復興する幻です。有名な、「涸れた骨の谷」の幻であります。この幻は、アダムが生きている者となった時のことを思わせる姿です。「創世 2:7 その後、神である主は、土地のちりて人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった。」初めに神は肉体を造られ、それからご自分の霊を吹き込み、生きたものとされます。イスラエルは、長いこと異邦人の支配の中で涸れた骨のようになってしまいました。けれども神は、初めにイスラエルという国を造られます。彼らの肉体を造られるのです。それから、御霊を降り注ぎます。それによって、霊的にも生きるようにされます。

37:11 主は私に仰せられた。「人の子よ。これらの骨はイスラエルの全家である。ああ、彼らは、『私たちの骨は干からび、望みは消えうせ、私たちは断ち切られる。』と言っている。37:12 それゆえ、預言して彼らに言え。神である主はこう仰せられる。わたしの民よ。見よ。わたしはあなたがたの墓を開き、あなたがたをその墓から引き上げて、イスラエルの地に連れて行く。37:13 わたしの民よ。わたしがあなたがたの墓を開き、あなたがたを墓から引き上げるとき、あなたがたは、わたしが主であることを知ろう。37:14 わたしがまた、わたしの霊をあなたがたのうちに入れると、あなたがたは生き返る。わたしは、あなたがたをあなたがたの地に住みつかせる。このとき、あなたがたは、主であるわたしがこれを語り、これを成し遂げたことを知ろう。…主の御告げ。…」

19 世紀半ばから始まった祖国帰還運動、シオニズム運動によって、ユダヤ人が大量移住したことによって一部、成就したことを読みました。けれども、土地に人々が集まり、その地が豊かになり、町々が建て上げられることと、国が建てられることは違います。けれども、初めにユダヤ人国家の構想を提示したテオドール・ヘルツルは、1897 年 9 月 3 日の日記の中で、既にユダヤ人国家の大本を築いたと書きました。けれどもこうも記しています。「こんなことを今、声高に言おうものなら、世間の物笑いになるだけだ。だがおそらく 5 年たてば、いや 50 年たてば必ずだれもが分かってくれるはずだ。」1897 年の 50 年後、つまり 1947 年、その 11 月に国連がパレスチナをユダヤ人とアラブ人に分ける分割決議案を採択し、国際的にユダヤ人国家が認知されたのです。そして 1948 年 5 月 14 日に独立宣言をしました。

当時の状況をよく表すものとして、1911 年に初版で発行されたブリタニカ百科事典には、ヘブル語についてこう書いてあるそうです。「古代ヘブライ語の正しい発音を取り戻す可能性は、中東にユダヤ人帝国が再び建てられる可能性と同じように、程遠いものである。(Possibility we can

again recover correct pronunciation of ancient Hebrew is as remote as the possibility that Jewish empire will be ever again be established in the Middle East.)」1911年ですから、もうすでにユダヤ人がパレスチナの郷土に帰還して、ベン・ヤフーダを中心としてヘブル語も日常会話に復活させるべく運動を起こしていた時です。それでも、百科事典でさえもがまるで信じられないという説明を行なっているのです。

けれども、繰り返しますが、彼らはまだイエスを自分の主として受け入れていません。ニコデモと同じように、新しく生まれなければならないというイエス様の言葉に耳を傾けなければいけないのです。

そして15節以降には、二つの杖をつなぎなさいという命令があります。それは、イスラエルがソロモンの死後、北イスラエルとユダに分裂したけれども、神が人々を引き戻される時に一つの国に統一するという約束であります。これは、ある意味、現代のイスラエル国によっても実現しています。ユダとその他の部族に分けられた国ではなく、十二部族が集まって来ている国になっています。しかし、24節以降には、「わたしのひとりのしもべダビデが彼らの王となる」とあります。これは、文字通りダビデがよみがえって、イスラエルの王となるという人もいますが、ダビデの子メシヤのことであろうと私は思います。つまり、キリストが再臨して、イスラエルの国を治められるということです。ソロモンによって国が分裂してしまったその傷を、神がキリストにあって癒してくださり、平和の絆によって一つに結ばせてくださいます。

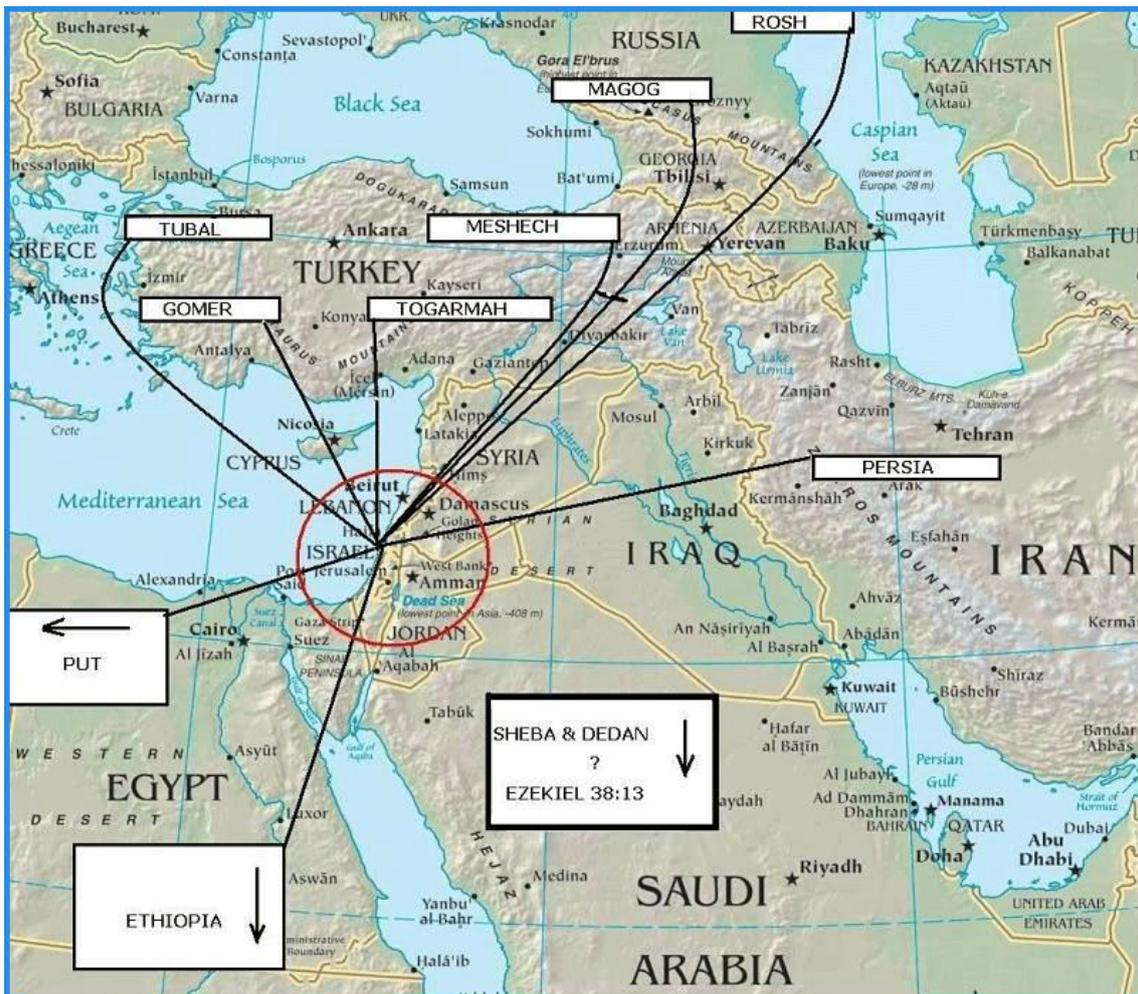
キリスト者も、この幸いにあずかっています。「キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、ご自分の肉において敵意を廃棄された方です。(エペソ 2:14-15)」当時は、ユダヤ人と異邦人はモーセの律法によって区別されていました。けれども、キリストにあって同じ体の中に入れられ、一つにされました。私たちも、男女、経済的格差、社会的な地位、そして民族の違いなど、いろいろな区別がありますが、それを一つにしてくださったのがキリストです。

2A イスラエルの救い 38-39

そして預言は発展します。イスラエルの土地は回復し、国が建てられました。そして人々は、平和の中で安心して過ごします。ところが、終わりの日に周りにある国々が攻めてくるという幻があります。しかし神が救ってくださるのです。ここで、イスラエルに約束されるのは、安全保障です。イスラエルがいかに、安全保障に心血を注いでいるかは、みなさんはよくご存知のとおりです。イスラエル旅行に行かれた方は、帰りに出国手続きの時に、厳しい荷物検査があることをご存知でしょう。団体で行くとその長の人々が、事細かい質問を受けます。それは彼らがテロリストによって、飛行機が爆破されたり、ハイジャックされるのを恐れているからです。実は、イスラエルは古代の歴史から、絶えず敵に囲まれ休むことができませんでした。その究極の救いの約束を神は与えられるのです。

1B 北の果てからの包囲網 38

38:1 さらに、私に次のような主のことばがあった。38:2 「人の子よ。メシエクトバルの大首長であるマゴグの地のゴグに顔を向け、彼に預言して、38:3 言え。神である主はこう仰せられる。メシエクトバルの大首長であるゴグよ。今、わたしは、あなたに立ち向かう。38:4 わたしはあなたを引き回し、あなたのおごに鉤をかけ、あなたと、あなたの全軍勢を出陣させる。それはみな武装した馬や騎兵、大盾と盾を持ち、みな剣を取る大集団だ。38:5 ペルシヤとクシュとプテも彼らとともにおり、みな盾とかぶとを着けている。38:6 ゴメルと、そのすべての軍隊、北の果てのベテ・トガルマと、そのすべての軍隊、それに多くの国々の民があなたとともにいる。



ここに、イスラエルを取り囲み、それを攻め取ろうとする軍隊の構成が書かれています。首謀者は、「メシエクトバルの大首長であるマゴグの地のゴグ」です。そして、ゴグと連携して、ペルシヤ、クシュ、プテが出陣し、またゴメル、ベテ・トガルマも参戦します。その他、多くの国民がります。

二つの特徴があります。一つは、主に北の果てにある国々だということです。15 節に「北の果てのあなたの国から」とあります。どこから見て北かといいますと、もちろんイスラエルから見て北で

す。そして、もう一つの特徴は、聖書に啓示されている「地の果て」と呼ばれるところ、イスラエル周囲の諸国ではなく、もっと先にある国々が主に関わっていることです。ペルシヤは今のイランです。けれどもイランの手前にイラクがあるし、その手前にはヨルダンがあります。けれども、当時のヨルダンであるアモン、モアブ、エドムはここに出てきません。当時のイラクであるバビロンも出てきません。

クシュはエチオピアで、今のスーダンとエチオピアの所です。プテはリビアであります。北アフリカですね。けれどもエジプトがいません。もっと、もっと遠いところです。そしてゴメルとベテ・トガルマは今のトルコにいたであろう人々であり、メシエクとトバル、そしてマゴグは黒海とカスピ海周辺を中心にして生きていました。今のロシアの南部とその下にあるグルジアやウクライナ、また「～スタン」とついている、旧ソ連南部のイスラム諸国です。けれども、北と言えばその手前にはシリアがあり、レバノンがあります。シリアはイスラエルの長年の宿敵ですが、それでもここに出てきません。

なぜならこの預言の特徴は、隣接する周囲の国々が戦争をすることではなく、もっと大きな、世界的な規模で、豊かになって平穩に暮らしているイスラエルに対して、それを貪ろうとする企みを描いているからです。

周辺諸国との戦いもちろん預言されています。代表的なのは詩篇 83 篇です。「4-8 節彼らは言っています。『さあ、彼らの国を消し去って、イスラエルの名がもはや覚えられないようにしよう。』彼らは心を一つにして悪だくみをし、あなたに逆らって、契約を結んでいます。それは、エドムの天幕の者たちとイシュマエル人、モアブとハガル人、ゲバルとアモン、それにアマレク、ツロの住民と いっしょにペリシテもです。アッシリヤもまた、彼らにくみし、彼らはロトの子らの腕となりました。セラ」アラブが「国を消し去って」という言葉は、アラブ諸国のお決まりの掛け言葉になりました。ユダヤ人を地中海に投げ込んでやる、と威勢をあげていましたし、今もあげています。

いま読んだところに出てこない国々もあります。例えばシリア、昔はアラムでしたが、アラムの首都ダマスコは倒れて、廃墟となるという預言があります。「見よ。ダマスコは取り去られて町でなくなり、廃墟となる。(イザヤ 17:1)」エジプトについては、それが女のように弱くなり、最後はイスラエルの支配下に入り、イスラエルの神、主を受け入れるという預言がイザヤ書 19 章にあります。さらにバビロンはイザヤ書 13,14 章によると攻められて滅びる、そして黙示録 17,18 章によると同じように滅びることが定められています。ですから、周辺諸国への預言はあるのです。けれどもここエゼキエル書では、そうした地域的な紛争ではなく、かなり広範囲の戦いを指していることを知らなければいけません。

ユダヤ人が世界から帰還してイスラエルが建国すると、周辺アラブ諸国がすぐに反応して中東戦争が始まりました。周辺アラブ諸国とは、合計四回の戦争をしました。建国直後の独立戦争は、

第一次中東戦争と呼ばれます。第二次はシナイ作戦、第三次は1967年の六日戦争です。この時に、イスラエルがエルサレムを自分たちの主権の下に置きました。そして第四次は、ヨム・キプール戦争と言い、エジプトまたシリアとの戦いでありました。実は、この戦いの後は主権国との戦争というのではないのです。実は、平和がかなり確保されているのです。エジプトとヨルダンとは平和条約を結んでいます。シリアは、イスラエルがにらみを利かせているのを良く知っているのです。ゴラン高原を越えて攻めてこようとは思いません。73年以降、そこは静かな国境地域となっています。ですから、その後の戦いは、パレスチナ解放戦線など、テロリストの組織でありました。

けれども、この一連の戦争の背後で世界が何かを企むかのように蠢いていました。イスラエルが数々の戦争で連勝し、この国が強くなり、豊かになったその時、マゴグの地のゴグが多く国々と連合してイスラエルを攻めようとする姿を、実は、今の時代に私たちは見ることができるのです。

もう一度、一つ一つの国々を見てみましょう。というか、もっとも大事な「ゴグ」についての説明をしなければいけません。日本語訳で「大首長」となっているところは、英語ではそのまま固有名詞として「ロシュ(あるいはロシ)」となっています。日本語の文語訳ではそのようになっています。読んでみます、「ロシ、メセクおよびトバルの君たるマゴグの地の王ゴグ」です。確かに「ロシュ」は、イスラエルの新年である「ロシュ・ハシャナ」で分かるように、聖書では「頭(かしら)」という意味で使われています。けれども、古代の文献の中ではロシュを一つの民族また国として扱っており、ヘブル語をギリシヤ語に翻訳した七十人訳には「ロシュ」と訳されています。

そしてこのロシュは、黒海とカスピ海の北の辺りの地域であることが古代の文献から分かっています。つまりロシアです。そしてマゴグですが創世記10章2節には、ヤペテの息子の一人です。主に地中海、そしてヨーロッパに散っていった人々ですが、ヨセフスなど、さまざまな古代資料から「スキタイ人」であることが分かっています。

今、アメリカで白人のことを「コケージアン(Caucasian)」と呼びますが、スキタイ人はインド・ヨーロッパ系の民族でコーカサスを中心に、ロシア南部地方のかなり広い範囲にいた遊牧騎馬民族国家であったと言われています。聖書には、コロサイ3章11節に「そこには、ギリシヤ人とユダヤ人、割礼の有無、未開人、スクテヤ人、奴隷と自由人というような区別はありません。」とパウロが言っていますが、「スクテヤ人」がそれです。パウロは彼らを未開人の隣に置っていますが、かなり獰猛な恐ろしい民族だったようで、征服した民のしゃれこうべを使って、その血を飲んだという記述もあります。ロシアのモスクワ博物館に行けば、スキタイ人の展示があるそうで、ロシア、また今の南にある国々に分布していたことは確かです。興味深いことに、中国の万里の長城はアラビア語で「アル・マゴグの壁」と呼ばれています。マゴグ、スキタイ人からの進入を防ぐ壁だったからです。

この章で出てくる彼らの武器は「馬」「弓」「槍」「剣」ですが、これらはスキタイ人の姿をよく表して

います。けれども、今ではかつてスキタイ人がいたところにイスラム教になった旧ソ連の諸国があり、彼らは今でも馬や剣を使っています。彼らが西洋人を剣で首切りの刑に処しますが、それは今でも行なっていることであり、そして効果的です。そしてメシェクとトバルですが、マゴグと並んでヤペテの息子として出ています。地理的には先ほど話したように、トルコの北東、黒海とカスピ海の辺りにいた人々です。

非常に興味深いことに今、私たちはロシアの台頭を見えています。もちろんロシアはソ連邦の時から強い国でしたが、プーチンが首相になってからは「母なるロシア」を復興すべく、独裁的な、拡張主義的な強国にする野心を持っています。2008年8月に、グルジアにロシアが侵攻しましたが、そこはマゴグ及びメシェクとトバルがあったと言われる地域です。そして今年、クリミアをロシアが編入したのですが、これも黒海のところにある半島で、マゴグの地であります。

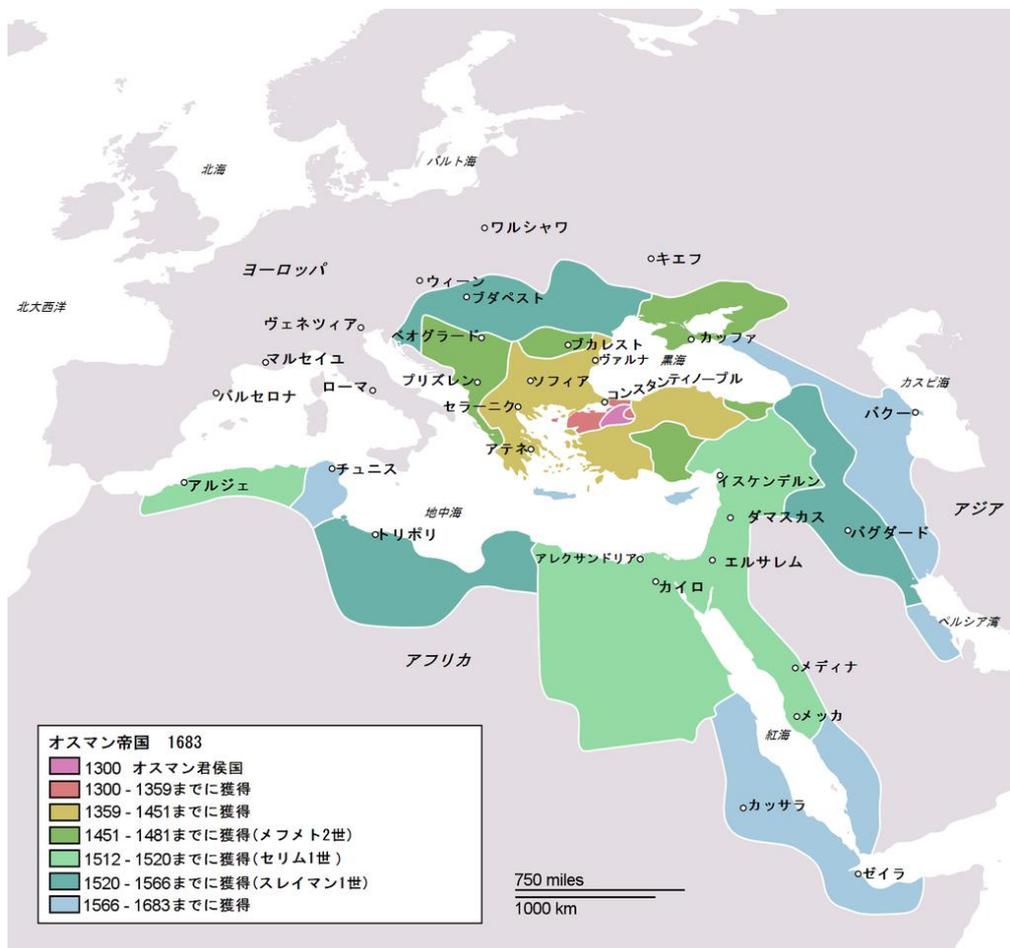
けれども、その中で着実にロシアの関与が強くなりました。六日戦争の時はソ連もアメリカも、世界大戦になるのを恐れて関与するのを控えましたが、ヨム・キプール戦争の時はシリア側に深く関わり、ロシア製の武器のみならず、ロシア軍の兵士も送ったのではないかとされています。そのため、地中海に浮かぶアメリカの戦艦が警戒態勢に入り、核戦争の危機に陥りました。4節をご覧ください、「わたしはあなたを引き回し、あなたのおごに鉤をかけ」とあります。ロシアがイスラエルを取り巻く環境の背後で、動き回る姿にそっくりです。私たちが知らなければいけないことは、この主語です。「わたしは」つまり主ご自身が、これらの動きをすべて支配されていることです。プーチンが怪しい動きをしています。けれども、それらはみな主ご自身の支配の中にあり、ご自分の怒りを下されるため、主があえてそうされているのです。

そしてロシュ、マゴグの王と手を組むのは「ペルシヤ」すなわちイランです。ロシアのプーチンとイランのかつての大統領アフマデネジャドが軍事的協定を結びました。イランは1979年に「イスラム革命」を起こしました。シーア派の原理主義者らによる革命によって、イランはイスラム法に基づく国家を設立しました。シーア派の持つ終末論は、キリストの再臨のように、イマームの到来によって終末が来るという教えがあります。彼が現れる前に世界には大混乱が起こり、そしてイスラムに敵対する勢力を排して、アッラーの国をこの地上に打ち立てる、という考えです。そして「このイマームを消極的に待っているだけではだめだ。我々の力で、世界に混乱を引き起こせば、その到来を早めることができる。」と考えています。その手段が今、ニュースを騒がせている核開発です。そして、彼らは核兵器をイスラエルそしてアメリカに向けて長距離弾道ミサイルで発射する意図をもって、核開発をしています。

このイランが、シリアに向けて影響力を及ぼし、さらにレバノンのシーア派のテロリスト組織ヒズボラを操り、またスンニ派ですが、イスラム過激組織であるハマスにも武器供与をしています。したがって、イスラエルには大きな脅威となっています。

そして先ほど言ったように、クシュはエチオピアで当時はスーダンも含みました。スーダンはイスラム原理主義の国です。こうしてみると、アラブ人でつながっているのではなく「イスラム」でつながっている国々と見ることができます。そして「ゴメル」と「ベテ・トガルマ」ですが、今のトルコに位置すると言われます。ゴメルもまた、ヤペテの息子の一人です。ドイツ方面であるという意見もありますが、トルコの北部という人々もいます。

トルコはつい最近まで世俗国家のはずでした。アメリカやイスラエルとも同盟関係を結んでいます。しかし、エルドアンが大統領となってから、トルコのイスラム化が急速に進みました。私が以前、この箇所を教えていた時は、「どのようにしてトルコがイスラエルに敵対するのか？」と不思議だったのですが、事実、その通りになっています。激しい反イスラエルの言辞で知られています。しかも彼は、ロシアともイランとも結びつきを強くしています。さらに、今回のイスラム国の台頭で、徐々に見えてきたのは、彼がオスマン・トルコ帝国の復興の野望を抱いていることです。興味深いことに当時の地図を見ると、まさにこの章に出てくる国々を合わせたものとそっくりです。



38:7 備えをせよ。あなたも、あなたのところを集められた全集団も備えをせよ。あなたは彼らを監督せよ。38:8 多くの日が過ぎて、あなたは命令を受け、終わりの年に、一つの国に侵入する。その国は剣の災害から立ち直り、その民は多くの国々の民の中から集められ、久しく廃墟であった

イスラエルの山々に住んでいる。その民は国々の民の中から連れ出され、彼らはみな安心して住んでいる 38:9 あなたは、あらしのように攻め上り、あなたと、あなたの全部隊、それに、あなたにつく多くの国々の民は、地をおおう雲のようになる。38:10 神である主はこう仰せられる。その日には、あなたの心にさまざまな思いが浮かぶ。あなたは悪巧みを設け、38:11 こう言おう。『私は城壁のない町々の国に攻め上り、安心して住んでいる平和な国に侵入しよう。彼らはみな、城壁もかんぬきも門もない所に住んでいる。』38:12 あなたは物を分捕り、獲物をかすめ奪い、今は人の住むようになった廃墟や、国々から集められ、その国の中心に住み、家畜と財産を持っている民に向かって、あなたの腕力をふるおうとする。38:13 シェバやデダンやタルシシュの商人たち、およびそのすべての若い獅子たちは、あなたに聞こう。『あなたは物を分捕るために来たのか。獲物をかすめ奪うために集団を集め、銀や金を運び去り、家畜や財産を取り、大いに略奪をしようとするのか。』と。

イスラエルが安心して住んでいるときに、この突如の攻撃が始まると主は教えておられます。イスラエルが安全になると聞けば、みなさん非現実的だと感じられるかもしれません。ここで、そのような考えを変える必要があります。今の時代は、イスラエル・アラブ間の紛争から、さらに周辺にあるロシア、イラン、その他イスラム諸国のもっと遠いところにある脅威に移っているということです。先ほどもお話ししましたように、アラブの国との国家間での戦いは、1973年のヨム・キプール戦争で実は終わりました。それ以後は、ゲリラ組織によるものであり、以前は革命社会主義的なものが主流でありました。あの日本赤軍もこの動きに加担しました。けれども、今はイスラム原理主義のものに代わっています。

それでも以前に比べたら、はるかに安全が確保されているのです。イスラエルに対する私たち一般の人たちの印象とは正反対に、当のイスラエル人たちは、建国以来最も安全を確保したと言って安心しているのです。その豊かにされたイスラエルに、これらの国々が攻め入っていくというシナリオです。

36章の学びの時に、世界有数の農業国であることを話しましたが、それ以上に死海から取れるミネラルを売り、そしてテルアビブを中心に先端技術が世界有数です。医療技術も先端を行っています。そして、イスラエル指導層さえ想像していなかったことが起こりました。イスラエルの中で石油が発掘されたことです。イスラエルは景気が上向きです。今のネタニヤフ首相が財務大臣であったころ減税措置を断行し、経済を活性化させました。そして、今、一人当たりの所得が百万ドルの人たち、いわゆる億万長者が最も集まっているのがイスラエルなのです。

そしてここに、少し反対表明を出すけれども、この軍事攻撃には何の意味もなさない国々の声が紹介されています。まず「シェバやデダン」です。これは今のアラビア半島、サウジアラビアになります。そして次に「タルシシュの商人」とあります。ツロに対する預言の中で、その貿易で活躍しているのがタルシシュの船です。今のスペインにあるとされます。そして興味深いのが「そのすべて

の若い獅子たち」という言葉です。この「若い獅子」は「植民地」と訳すこともできます。アメリカ大陸を発見したのが、そうこのタルシシュ出身のコロンブスです。

ここから分かるのは、アメリカはこのことが起こる時は、力を持っていないということです。これは今、確実に起こっています。アメリカの力が相対的に低くなりました。そして、今年は大きなことが起こりました。アメリカとイスラエルの仲はだんだん悪くなっています。オバマ大統領がその同盟関係を軽視しているからです。そしてガザ戦争が七月に起こりました。その時にイスラエルと、周囲のアラブ諸国は驚くべき動きに出してきました。それは、イスラム国とイランに対抗するため、水面下で動き始めたからです。今まではパレスチナの大義がありましたから、アラブはイスラエルに敵対していたのですが、エジプトもヨルダンもサウジアラビアまでがガザ戦争についてイスラエルを批判しなくなりました。そして関係の正常化を呼びかけたのです。彼らにとっても、イスラム国とイランは共通の敵であります。

ですから、イスラエルと周辺アラブ諸国が敵対関係にあるというところから、そのアラブ諸国のさらに周辺にある国々が動き始めている訳であり、ここでシェバとデダンは、ゴグの率いる戦いには加わっていません。

38:14 それゆえ、人の子よ、預言してゴグに言え。神である主はこう仰せられる。わたしの民イスラエルが安心して住んでいるとき、実に、その日、あなたは奮い立つのだ。38:15 あなたは、北の果てのあなたの国から、多くの国々の民を率いて来る。彼らはみな馬に乗る者で、大集団、大軍勢だ。38:16 あなたは、わたしの民イスラエルを攻めに上り、終わりの日に、あなたは地をおおう雲のようになる。ゴグよ。わたしはあなたに、わたしの地を攻めさせる。それは、わたしがあなたを使って諸国の民の目の前にわたしの聖なることを示し、彼らがわたしを知るためだ。38:17 神である主はこう仰せられる。あなたは、わたしが昔、わたしのしもべ、イスラエルの預言者たちを通して語った当の者ではないか。この預言者たちは、わたしがあなたに彼らを攻めさせると、長年にわたり預言していたのだ。

一気に攻めるその日について、多くの預言者が語ったと言います。ゴグについては、ここが初めてですが、けれども、イスラエルを一気に攻めようとする姿はこれまでも見ました。出エジプトがそうでした。また、イスラエルが多くの国に取り囲まれて、そこから救われることは他に数多く書かれています。

38:18 ゴグがイスラエルの地を攻めるその日、..神である主の御告げ。..わたしは怒りを燃え上がらせる。38:19 わたしは、ねたみと激しい怒りの火を吹きつけて言う。その日には必ずイスラエルの地に大きな地震が起こる。38:20 海の魚も、空の鳥も、野の獣も、地面をはずすすべてのものも、地上のすべての人間も、わたしの前で震え上がり、山々はくつがえり、がけは落ち、すべての城壁は地に倒れる。38:21 わたしは剣を呼び寄せて、わたしのすべての山々でゴグを攻めさせる。..

神である主の御告げ。・・彼らは剣で同士打ちをするようになる。38:22 わたしは疫病と流血で彼に罰を下し、彼と、彼の部隊と、彼の率いる多くの国々の民の上に、豪雨や雹や火や硫黄を降り注がせる。38:23 わたしがわたしの大いなることを示し、わたしの聖なることを示して、多くの国々の見ている前で、わたしを知らせるとき、彼らは、わたしが主であることを知ろう。」

主は、まず大地震を引き起こされます。そして、彼らを同士討ちさせるようにさせます。それから疫病で彼らを打ちます。そして大事なのは、主ご自身が聖なることを示して、この方こそが主であることをこのことによって知ります。

この大きな出来事はまだ起こっておりません。けれども、36 章が成就し、37 章も成就し、ついに38-39 章だけになっており、イスラエルがこれまでになく豊かで、安全に守られているということについてはその通りになっています。

2B 確実な死の確認 39

そして 39 章に入ります。主がゴグを倒した後の姿が書かれています。

39:1 「人の子よ。ゴグに向かって預言して言え。神である主はこう仰せられる。メシエクとトバルの大首長であるゴグよ。わたしはあなたに立ち向かう。39:2 わたしはあなたを引き回し、あなたを押しやり、北の果てから上らせ、イスラエルの山々に連れて来る。39:3 あなたの左手から弓をたたき落とし、右手から矢を落とす。39:4 あなたと、あなたのすべての部隊、あなたの率いる国々の民は、イスラエルの山々に倒れ、わたしはあなたをあらゆる種類の猛禽や野獣のえじきとする。39:5 あなたは野に倒れる。わたしがこれを語るからだ。・・神である主の御告げ。・・39:6 わたしはマゴグと、島々に安住している者たちとに火を放つ。彼らは、わたしが主であることを知ろう。39:7 わたしは、わたしの聖なる名をわたしの民イスラエルの中に知らせ、二度とわたしの聖なる名を汚させない。諸国の民は、わたしが主であり、イスラエルの聖なる者であることを知ろう。

マゴグが倒れる姿が描かれています。自分たちがイスラエルに来ていますが、本国に対して主が火を降らせて滅ぼされます。

39:8 今、それは来、それは成就する。・・神である主の御告げ。・・それは、わたしが語った日である。39:9 イスラエルの町々の住民は出て来て、武器、すなわち、盾と大盾、弓と矢、手槍と槍を燃やして焼き、七年間、それらで火を燃やす。39:10 彼らは野から木を取り、森からたきぎを集める必要はない。彼らは武器で火を燃やすからだ。彼らは略奪された物を略奪し返し、かすめ奪われた物をかすめ奪う。・・神である主の御告げ。・・39:11 その日、わたしは、イスラエルのうちに、ゴグのために墓場を設ける。それは海の東の旅人の谷である。そこは人が通れなくなる。そこにゴグと、そのすべての群集が埋められ、そこはハモン・ゴグの谷と呼ばれる。39:12 イスラエルの家は、その国をきよめるために、七か月かかって彼らを埋める。39:13 その国のすべての民が埋め、

わたしの栄光が現わされるとき、彼らは有名になる。・・神である主の御告げ。・・39:14 彼らは、常時、国を巡り歩く者たちを選び出す。彼らは地の面に取り残されているもの、旅人たちを埋めて国をきよめる。彼らは七か月の終わりまで捜す。39:15 巡り歩く者たちは国中を巡り歩き、人間の骨を見ると、そのそばに標識を立て、埋める者たちがそれをハモン・ゴグの谷に埋めるようにする。39:16 そこの町の名はハモナとも言われる。彼らは国をきよめる。

まるで放射能に汚染されたかのように、最新の注意を払った遺体処理を、七か月、かかって行きます。しかし、これは衛生的なことだけでなく、儀式的な意味もあるでしょう。レビ記には、死体は汚れており、触れてはいけないという規定があります。ここの海は死海のことでしょう、死海の東、モアブ辺りにその死体処理が行われるようです。

39:17 神である主はこう仰せられる。人の子よ。あらゆる種類の鳥と、あらゆる野の獣に言え。集まって来い。わたしがおまえたちのために切り殺した者、イスラエルの山々の上にある多くの切り殺された者に、四方から集まって来い。おまえたちはその肉を食べ、その血を飲め。39:18 勇士たちの肉を食べ、国の君主たちの血を飲め。雄羊、子羊、雄やぎ、雄牛、すべてバシヤンの肥えたものをそうせよ。39:19 わたしがおまえたちのために切り殺したものの脂肪を飽きるほど食べ、その血を酔うほど飲むがよい。39:20 おまえたちはわたしの食卓で、馬や、騎手や、勇士や、すべての戦士に食べ飽きる。・・神である主の御告げ。・・

主は、ちょうど例祭などで家畜のいけにえを大量にほふり、和解のいけにえを食べるように、死体を猛禽と野獣が飽きるほどに食べる、とされています。これは、当時の、その中東の地域の人々にとっては、私たちが読むよりもさらにむごたらしい光景として読みます。なぜなら、どのように尊厳をもって葬られるかが今よりもさらに重要な課題となっていたからです。死ぬのは惨いことだが、死んだ後に丁重に葬られないことは、自分の尊厳をひどく傷つけるものでした。

こうして、自分たちの敵が死ぬ場面を彼らはしっかりと見ます。このことによって、ちょうど出エジプトと同じように、二度と、自分たちの敵が自分たちを脅かすことはないことを確認するのです。これは、キリスト者の罪に対して死ぬことと原則が似ています。「ローマ 6:11 このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい。」古い自分、罪に支配されている自分を、神は十字架のキリストにあって殺してくださったのだ、自分は死んでいるのだと確認するのです。

39:21 わたしが諸国の民の間にわたしの栄光を現わすとき、諸国の民はみな、わたしが行なうわたしのさばきと、わたしが彼らに置くわたしの手とを見る。39:22 その日の後、イスラエルの家は、わたしが彼らの神、主であることを知ろう。39:23 諸国の民は、イスラエルの家が、わたしに不信の罪を犯したために咎を得て捕え移されたこと、それから、わたしが彼らにわたしの顔を隠し、彼らを敵の手に渡したので、彼らがみな剣に倒れたことを知ろう。39:24 わたしは、彼らの汚れとそ

むきの罪に応じて彼らを罰し、わたしの顔を彼らに隠した。

ゴグを殺すという出来事によって、これまで主が何を行なわれていたのかを、諸国の民も、またイスラエルの家自身も知ることになります。

39:25 それゆえ、神である主はこう仰せられる。今わたしはヤコブの捕われ人を帰らせ、イスラエルの全家をあわれむ。これは、わたしの聖なる名のための熱心による。39:26 彼らは、自分たちの地に安心して住み、彼らを脅かす者がいなくなると、わたしに逆らった自分たちの恥とすべての不信の罪との責めを負おう。39:27 わたしが彼らを国々の民の間から帰らせ、彼らの敵の地から集め、多くの国々が見ている前で、彼らのうちにわたしの聖なることを示すとき、39:28 彼らは、わたしが彼らの神、主であることを知ろう。わたしは彼らを国々に引いて行ったが、また彼らを彼らの地に集め、そこにひとりも残しておかないようにするからだ。39:29 わたしは二度とわたしの顔を彼らから隠さず、わたしの霊をイスラエルの家の上に注ぐ。・・神である主の御告げ。・・」

ここから、約束の民の帰還には二段階があることが分かります。初めは、これらの試練を受ける前に集められている彼らの姿があります。そして、さらに、ゴグからの救いを経験したイスラエルに、さらに離散のユダヤ人をここに集めるという働きを神は行われます。これが、キリストが再臨される時でしょう。

ところで、このエゼキエルの出来事はいつ起こるのか？という疑問があります。いろいろな説がありますが、その中でハルマゲドンのことであるという人たちがいます。それは、一理あります。ハルマゲドンの時にキリストが来られて、それでこれらの敵を倒されるというシナリオは確かに、黙示録 19 章にも見られるものです。しかし、黙示録における敵の囲い込みはもっと大きな、全世界におけるものです。これが、ダニエル書 9 章 27 節にある最後の七年、第七十週目の前であるという人々もいます。これも、一理あるでしょう。私はやや、こちらの考え方をしています。したがって、私たちの次に見る出来事は、もしかしたらこのゴグなのかもしれません。いや、その前に携拳があります。携拳は何ら徴も伴わない、今起こってもおかしくない出来事です。このように、私たちの地上で起こっている徴は、たしかに終末を指示しているのです。

最後に、再び「わたしの霊をイスラエルの家の上に注ぐ。」と神は約束されました。そして 40 章から、神殿が建てられている幻を見るのです。これはイスラエルに対する約束ですが、私たちにも同じように、今、聖霊の注ぎを受けて、聖霊の宮である教会において神の栄光を見たいです。このことを、次の年、2015 年を迎えるにあたって祈っていきましょう。